



私は変われる?!

「子供を育てる」というのは難しい。自分の子どもなら何歳になっても自分で責任を取れると思うとまだ少し気分が楽になるのですが、他人様のお子さんとなるとまた話は別なのです。良かれと思ってしたことでも、上手く伝わっておらず、ご両親にまで誤解された日にはそりゃあもう大変。どうして教師なんて因果な職業についてしまったのだろうと後悔すること

も。上手くいっている時は「こんな楽しい職業辞められない」と思えるからに他ならないのですが、関係が悪くなっている時には、「私じゃなきゃもつとこの子も幸せだったのかもしれないのに・・・」と思ったりします。

私の勤務校はアントロポゾフィー(人智学)の思想のもと集まった人たちが教師をしているので、教育の根底にあるのは「全ては予定

されていた事で、自分はこの生徒と出会うためにここにいる。」という考え方がつまずいてしまっている時にすでに決まっていたことなのです。それを、自分が決めたかと思っているか、神様が決めたかと思っているかは個人差があると思います。どちらにしても出会うことは決められていたのです。では、この出会いをどう

「過去と他人は変えられない。変えられるのは自分と未来だけ。」相手に文句を言うのではなく変えられる事は自分で変える。もちろん正しいと思っている事は変えられないので、それをどうやって変えるかを工夫すると言う事です。年齢に応じて、また性格に応じて伝え方はそれぞれ違うのです。大抵は、自分のやり方があって、それをどんな時にも使っていくのではありません。それは上手いかなんかという事ではない。一年生から九年生までの

「神様はその人が越えられない試練はお与えにならない」との言葉を信じつつ、でも、「だから頑張って努力しなくていいわけではありませぬよ。」と神様に問いながら、そして、

「今回はちょっとお休みついでにはいけませんか?」などと都合のいいお願いもしながらなんとか日々を送っています。

健康に守られているおかげで続けていけるこの仕事。後何年やっているとかなんか考えると「二日一日が宝物」なのだなど感謝し

発行元
紀南教会
和歌山県田辺市
下屋敷町80
TEL/EAX:0739-25-1191
E-mail: kinan-ch@beach.ocn.ne.jp
H・P: http://www.kinan-ch.org/

九年間同じ人間が担任をするのですから、なんとかやり過ぎなんてことはできないのです。ウマが合わないですまない世界です。頑固者の私も随分勉強させてもらいます。もう、子どもとわたしの根比べだったりします。実にうまくヒョウヒョウと立ち回る人を見ると尊敬してしまいます。

つつ、日々是精進と毎日を送っています。
P・m・Patty

全てに意味があったように思う。亡くなる九ヶ月前に家族に病名が告げられた。それまで体調が悪かったものの普通の生活をしていた父は、この時期を境に坂道を転がるように今まで当たり前に出来ていたことが、ひとつずつ出来なくなっていく。仕事に興味と言っていた。父は、亡くなる三ヶ月前まで自由に動かなくなった身体を引きずって仕事をしていた。長い間、父の側でアシスタントとして手伝ってきた私には、父が亡くなったことよりも、仕事がいかに上できないと決断したその姿を見ることが辛かった。

人生の最後の時は穏やかで、感謝に満ちていたと思う。でも神様は最もよい時に、それをなされたんだと思う。ひとつでもタイミングがずれていたなら私たちが家族は、継続した生活を続けていくのが不可能だったのだから・・・。



「地球とエコ」

紀南教会牧師 上山耕司

「地球とエコ」 「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。」 (創世記1:31)

家庭から出るプラスチックゴミの何と多いことか。月二回の収集日には大きな袋一杯になる。「エコ」という言葉をよく耳にする。エコカー、エコポイント、エコキュート、エコバツグなど。エコとはどういう意味で使われているのだろうか。例えば、エコバツグ、数年前から近くの店に買い物に行くとき、買い物袋を持参するようになった。その袋のことを「エコバツグ」と言う。以前のよう

に無料でビニール袋をくれないなくなったからだ。私の子供の頃、60年前はビニール袋はなかった。主婦の誰もが買い物カゴを持ってお店に行った。エコバツグが叫ばれ出したのは、石油資源には限りがあるのと、ビニールは燃やすと有毒ガスを発生して、大気汚染のもとになる、またビニールは腐らないので、捨てると環境汚染になるからだ。動物たちがビニール袋を誤って食べ(奈良公園の鹿が観光客からお菓子の袋を奪って、袋まま食べていた)、死亡するケースもある、と聞

く。ビニール袋を減らすエコバツグは地球に優しい、自然を大切にすることに繋がります。エコとは「節約、省エネ」という意味で使ってきたが、それだけでなく生態系全体に関わることなのである。「エコ」とは正確には「エコロジー」を略したもので、訳せば「生態学」という意味である。つまり、エコとは自然に優しい、自然を大切に、人間や動物が自然の中で共存、共生できる環境を考えることである。神が造られた本来の姿である。私達は自然を、地球をどのように考えてきたのだろうか。地球は無限と考えられてきたが、近年、地球には限りがあると知られるようになった。大型船でマグロを一網打尽にする。それではさすがの大海もその資源が尽きる。工場

や車から出る煤煙は自然の森や木々が、また汚染水は川や海が、浄化してくれてきたが、現在はその浄化能力をはるかに超えている。その結果、多くの生き物が絶滅の危機に瀕している。人間は自然や地球を誤って捕らえてきた。つまり、自分勝手な欲望の対象としてきた。いや創造主なる神を軽んじ、自らが主人となつて、バベルの塔を築いて来た。自然も、弱者も二の次、経済最優先の社会を突っ走っている。原発はそれを象徴している。

エコとは自然に優しい、自然を大切に、人間や動物が自然の中で共存できる環境を考えることである。私は子供の頃、川で魚を捕り、山で栗やキノコを取り、自然の中で育まれ、癒されてきた。それらが人間の欲望や争いによって破壊されていることを悲しく思う。この地球は神の御手によって完璧に造られたものであり、神はそれを人間の手に委ねた。人間にとつて最も大切なことは、神がどのような思いで地球を委ねたかを知ることである。それが究極のエコである、と私は思う。

春遠からじ。厳しい寒さだった冬が終わりに近づきました。これからは、主の創造の業が華やかな季節です。次号四五号はスツカリ春の、五月三十一日に発行の予定です。

